



多田 燐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

凸凹

### 【ZPDF】

Z7032Z

### 【作者名】

多田 燐

### 【あらすじ】

形に魅入られた男と……。

顔を出したばかりの朝日があたりをオレンジ色に染めている。僕もリビングに置かれたつた一つの回転椅子に腰を下ろしながら、その身を太陽の光になめられるまにしている。  
暖かく優しい……。太陽を手でかざしながら今日も聖なる時間が訪れたことを知る。

振り返ると穢れのない純白の壁が水彩絵の具のような淡い橙色に濡れている。中心にはアラビア数字の1のような、椅子に座った僕の姿が浮かんでいる。オレンジ色の靄とは対照的な濃い濃厚な黒。背を丸め、足を組んでみるとロダンの「考える人」にも見える。

春の朝日が僕の背中を優しく照らす。今日の朝日は申し分ない。空も光をさえぎる雲一つなく鑑賞日和だ。

席を立つ、1が半分ほどの長さになる、隣の部屋に向かい、作品を台車に載せ、リビングへ運ぶ、椅子を片付け、代わりに作品を置き、僕自身は窓枠の下に隠れるように腰を下ろし、壁を仰ぎ見る。肩から始まり、徐々に細くなり、腰に至つて再び膨らみを取り戻す、卵形の流線型。肩から十字架を形作るよう伸びた細い腕は白鳥が朝日を浴びながら精一杯翼を広げているようだ。力強く、また儂い。右足を前にしているが、そのうち光源に向かつて走り出しそうな勢いまで感じさせる。

女性の肉体の美とは光を浴び、影にして初めて表現可能な題材だ。人間は文明が発達するとともに絵を、写真を、映像を発明し、より美を表現する術を模索し続けてきたが、結局は不純物に飾られた不完全なものでしかない。肉体に宿る美を培り出すために音など必要ない。背景も、色までも邪魔な存在だ。

岡本太郎は縄文時代の土器や土偶といった出土物を撮影する際、

表面の凹凸に光を当て、影を作ることで原始の力や神秘を写し取ろうと試みた。物の表面のみを写すことを良しとする研究者達には思ひもよらないアイディアで縄文時代などに興味を持たない多くの人々の心に新たな光を差し込ませることに成功した。

僕は岡本太郎の功績はある程度は評価している。しかしながら彼の主眼は対象の表面に止まっていた。闇に浮かぶ神秘も形だけの現実を引き立てるための道具とみなされ、内なる美を霞ませていた。不純物の取り除きは不完全であつたといわざるを得ない。

僕は人類史上誰も辿り着いたことのない形を元に黒の力を表現する術を知っている。不純物を取り払い、光と影の境界に現れる微かな表面と内なる神秘に彩られた影を作るのだ。

それが神が僕に与えた使命なのだ。

2

街。

餌にたかる蟻を髪髪とさせる人の群れ。

平々凡々な兵隊蟻達に埋もれた女王蟻を探すことが僕の使命、生きる目的だ。

首都圏でも一・二を争う利用者数を誇る駅をそばに持つこの街で、日々観察に適した大通りに面する喫茶店で腰を落ち着け、窓の外を行く大群を見つめる。人の多さゆえ宝石とは似ても似つかない歪な石ころや汚れたガラス細工ばかりを目にすることとなるが、多くいるからこそダイヤモンドやサファイアを拾う確率も増える。また旅行者も多く一度逃せば一度と出会えぬ珍種もあるう。僕には神が与えた千載一遇のチャンスを無駄にしてはならぬ重大な責務があるのだ。

朝から何度も場所を変える。意図して変えることを心がけている。一箇所で間発掘を続けることは、第三者から言葉や行動で妨害にあう可能性を有する。喉を潤したコーヒーは何杯目だろうか。眺め続

3

ける目にも疲れが出てきた。気づけば空は朱に染まりつつある。宝探しは平坦な道ではない。神は今日の僕には出会いを準備しているのであろう、そう感じ固まつた関節を労わりながら席を立とうとしたときだった。

目の前をエメラルドが通り過ぎた。

咄嗟に視線で追いかける。間違いない、念願の、待ち焦がれた原石だ。うちに広がる歡喜を押さえつけながら、僕は喫茶店を飛び出す。

慌ててはいけない。今から扱う宝石はこれまでに見たことないほど縁に覆われ、柔らかく、纖細な力を宿している。

じっくりと後を追うに限るだろう。

彼女はどんどん駅から離れ街の深層部へと歩を進めていく。街に慣れていないのだろう、時々手元に視線を落としては道行く人々に話しかけている。この様子ならば話しかけることは容易いだろう。尾行を開始して三十分ほど、エメラルドは目的地に辿り着いたのか、ある建物に入つていった。僕は歩みを止めることなく建物の前を通り過ぎる。むき出しのコンクリートと街に根ざした歴史を感じさせる鱗が特徴的な一階建ての小さなビル。宝石を飲み込んだ入り口は地下へ通じているようだ。【UP SET】と文字が浮かび上がるネオン。どうやらライブハウスらしい。

気づけば空は朱を飲み込んだ闇に支配されつつあった。

バンドの名前は知らないがライブは一・三時間続くことがポスターに記されていた。ライブハウスの斜め向かいの喫茶店に入り、時間を潰すことにする。時間ゆえか表向きのカフェの装いからバーへと姿を変えつつある。店員やメニューがしきりにアルコールを勧めてくるのも自然の成り行きといえよ。しかし僕はコーヒーを注文する。アルコールなど必要ない。この崇高なる行為に酔っているのだから。土に埋もれた宝石をあと少しで僕の美術館に飾ることのできる、コレクションに加えることができる、神に献上する宝物を創造できる、後に控える歡喜の瞬間に思いを馳せながら只管に待つ。

それがこの上なく幸せなのだ。酒など必要ないのだ。

我が城に明かりを燈す。

宝石を磨き清めるアトリエ、厳重に保管するための美術館、そして朝日差し込む鑑賞室、三つの部屋で構成されたよりら賜りし使命を遂行するための聖域。以前、人間生活を嘗んでいた住居は人一人入り込むことが限界の鼠小屋。宝石に欠かせない太陽の光も満足に供給できない有様だつた。神が使命達成のために一人の両親を犠牲として生まれた金を元手に聖なる光が満ちる高層マンションを手に入れたのだ。

発掘した原石をアトリエに運び込む。いくら僕の目に狂いはないと知りはしても、原石そのままでただの石と大差ない。無駄を省いた適切な形にカットし、磨き、研ぎ澄ましてこそはじめて光沢を放つ。数時間後日にするであらう理想形をイメージし、形状にあつた角度と姿に固定する。否否、それ以前にせねばならぬことがあつた。最も悪しき不純物にして変化激しく安定しない異分子、頭部を切除するのだ。

朝日が昇る。

じつくりと熟成させるように時間を掛けながら、影が、人体の真の美が姿を表す。今回発掘した原石は迷える子羊そのままで青葉の香り抜けきらぬ姿が特徴的であった。ゆえに原石から宝石への再誕を遂げたモチーフこそ適切と気づき、ボッティチエッリの名画【ビーナス誕生】のビーナスの姿を模した。

オレンジ色に染まるキャンバスには一見すると直立しているだけのエメラルドの姿。よくよく見てみると肩や太ももが内側に縮こまつている。左肩と恥部にはそれぞれ右手左手の指一本一本の形状が小さな山をなしている。

豊満な母性を内包した姿よりも、未来を予感させる姿こそ誕生といつ言葉にふさわしい。

身を焼く恥じらいの心と子鹿の「」とを生に立ち向かう内なる力が影に宿つていた。

「何を見ているんですか」

振り返ると見知らぬ男が立っていた。

普遍な、変化のなき一日だった。行きつけの喫茶店を回り、原石を探して回っていたときのことだ。二階のテナントに入った庶民派チーン店のカプチーノを喉に流し込みつつ、一面ガラス張りの壁から階下を行き交う鉱山を眺めていた。

そこに声を掛けられた。

男は自然など動作で僕の向かいの席に腰を掛けた。見覚えはない、これまでの人生でこのような男と声を交わしたことはないはずだが。「何か面白いものが見えるかい」

「さあ……」

「ごく稀にこのように話しかけてくる輩がいる。僕の神聖なる行いを理解できず、単なる人間觀察か何かと勘違いして近づいてくるのだ。邪魔者は冷淡に扱つて追い返すに限る。

「あなたには関係のないことですよ」

「でも、毎日そうやって窓から外を見てるじゃないですか」  
僕は顔を上げた。一日で利用する喫茶店は四件ほど。常連として

人に付きまとわれること嫌い、意図的に一つの店には一週間以上間隔を空けて訪れるようにしている。幸い人で溢れかえるこの街には喫茶店が星の数ほど軒を連ねている。

それにもかかわらず男は僕の行動を毎日といつた。

「あなたのあつしやる通り人を見ているだけですよ。まあ、人間觀察というよりは人間鑑賞というのが正しいのかもしれませんが」

「觀察と鑑賞ではちがうものですか」

男は手に持っていた新聞を机に置き、身を乗り出してきた。新聞の表面には連續男女失踪という大きな見出しがつけられた記事が掲載されている。記事を横目で追いながら、

「観察と鑑賞では大きく意味合いが違つてきますよ。観察は対象の行動に着目していますが、鑑賞は対象を芸術品としてめでる側面がありますから」

「つまりあなたにしてみたら眼下にダヴィデ像やヘラクレス像のような芸術品が群れを成していると見えるわけですね」

「何もすべての人間が宝石のような価値を持っているとは思つていません。美の形にも様々ありますが、どの条件をも満たしていない人ばかりですよ。僕は空から人の群れを眺めて、万に一つの美を持つ芸術品を見つけ出すことをこの上ない喜びに感じるのですよ」

僕はカプチーノで喉を潤した。

「絵か写真をやつているんですか。それともまだ学生ですか」

「残念ながら学問として修めるることは諦めましたよ。もちろん挑戦したこともありましたが、三度目の挑戦に失敗したとき諦めました。それでも好きなことですから、我流で腕を磨いているつもりにならないがら燃り続けているんですよ」

「我流ですか。一度機会があれば作品を拝見したいですね」

「勘弁してください。人に見せるものではないので」

男は執拗なまでに話しかけてくる。これまでならばあからさまな態度で接していれば相手が根負けして席を立つのが常だつた。ところがこの男は僕がどれだけ無愛想に接しても、次から次へと話を振つてくる。相手を図に乗らせまいとするが、相手の話に合わせてしまう僕がいる。話に気をとられて鉱山を眺めることもままならない。半ばあきれながら何気なく窓の外に目を移した。そして戦慄した。ひとつ目の美が私を眺めていた。

「どうかしましたか」

固まつてしまっていたのだろう。声をかけられ反射的に男の顔を見たが、自らの使命に立ち返り原石がいた場所に視線を戻した。そこには右も左も同じ石が行き来しているだけだつた。僕は焦つた。

「どうかしましたか」

「すみませんが、先に行かしていただきます」

僕は席を立つた。会計を済ませ出口に向かおうとした。出口には男が立っていた。

「もしよろしければ連絡ください。美術品には私も少々興味がありますのでね」

そういうて名刺を差し出した。それをひつたくる様に受け取り、外へ飛び出した。

「また会いましょう」という声を背中で受けながら、姿をくらませた原石を追いかけるべく階段を駆け下りる。

手渡された名刺には不動晃輔という名が記されていた。

#### 4

昨日見逃した原石が脳裏に焼きついてはなれない。不動某なる人物を振り切り喫茶店を飛び出し、街を何時間とさ迷い歩いたが見つけ出すことは叶わなかつた。あの男さえいなければ僕は今頃歓喜に打ち震え、幸せの絶頂にいたに違いない。

見たのは一瞬だが忘れられぬ情熱のルビー。鍛えられた肉体のみが発する力強さ。街で多くの原石を見てきたがあのよくなタイプは初めてだ。完成形のイメージは出来上がっている。にもかかわらずこの手で美の完成を許されぬこのもどかしさ。

僕は微かな希望を胸に街へと向かうことにした。当てもなく向かつた先は昨日ルビーと出会つた喫茶店。昨日の今日だ、不動が張つている可能性もある、何より僕の神聖なる行いを悪魔の所業と書き立てる愚人どもがいるほどだ、同じ店に足を運ぶことは危険を伴う。それでも原石への思いが勝つた。

扉を開けると窓際のいつもの席に座る。何一つ感動もなくアスファルトの上を行き交うゴミ屑を見下ろす。いやゴミ屑以外の価値ある石たちも目の前を通り過ぎていいのかもしれない。が、今例えルビー以外の原石に出会つてもそれらを昇華させる自信がない。

それほどまでにあのルビーは僕にとって魅力的だったのだ。僕は

打ちひしがれながら、傷心を苦めのカプチーノで癒していた。

「あ、あの……こちらよろしいでしょうか」

声を掛けられた。不動かと思ったが女のそれだ。僕はゆっくりと顔を上げ相手を見た。

驚きのあまり目を見開いたまま体が呼吸をと止めてしまっていた。目の前にルビーの原石が立っていた。やつとの思いで呼吸を再開し、席へと促した。しかし、後が続かない。僕には話しかけられる理由が見出せないのだ。どう話しかけたものか思いあぐねていたところに言葉が差し出された。

「先日は一体何をお話されていたんですか」

「え」

「先日この喫茶店で男性と向かい合わせでお話されていましたよね。一体何を話していたのかなあと」

「何故そのようなことを」

「あ、すみません突然こんなこと聞かれたら驚きますよね。実は私は読唇術の心得があるんです。この前何気なく下からこのお店を見上げたら、あなたとお向かいの男性が熱く語り合っている姿を目にしていました。お互い静かな言葉使いとは裏腹にとても力強い目をしていたんですけど、あなたと目が合つて……驚いて逃げてしまつたんですね。逃げ出してしまいましたが、やっぱり何を話していたらあなたの方のような目つきができるのかと思って。それを聞きたくて毎日この店に通っていたんです。あなたはあの日以降顔を出されなかつたのでもう駄目かと諦めていたんですが、今日こうやってお会いできて嬉しいです」

向かいに座る芸術品候補には僕と不動の似非芸術話がよっぽど情熱的なものに見えただろう。あのときの僕は決して理解されぬ美の真実をかいつまみ、過去のおろかな自分自身について話しただけだと思うが、無意識のうちに熱がこもつていたのだろうか。

「あの時話したいことに大きな意味はありません。あの男は話し

たことはおろか会つこともあの日が初めてだったのですから。彼が外を見つめる僕を気になって話しかけてきたので、僕はその理由を話しただけに過ぎませんよ」

「私にもその理由を教えてください。きっとそれが情熱の源に違いないです」

内在する美的要素とは裏腹にずいぶんと不純物が多いようだ。実際に煩わしい。これだから頭という邪魔なパーティは不要なのだ。

このように口の減らない相手には力強くというわけにもいかない。また喫茶店で事を荒立てる事もできない。僕はそのまま不純物が求めるままに会話を続けた。どうやら外形とは不釣合いな写真などを嗜んでいるというので、我流で創作活動などをしていると呴いてみたら、不動同様に食いついてきた。そこで作品を見せるためにと我が城へ招待してみると二つ返事で了解した。くだらない言葉を延々と聴かされる点に関しては閉口させられたが、共通点からあつたりアトリエへ連れ込めるることは運がよかつた。

喫茶店を出て城へ向かうまで言葉を覚えた鳥のようにわめいているのが聞こえたが、僕は一度逃したルビーの原石をこの手で宝石へと変えることができる喜びを噛み締めていた。

「さあ、どうぞ人が訪ねてくることがないので散らかってつて申し訳ないですが」

原石は後ろを向いている。絶好のチャンスだ。

喜びたまえ、君は今から神に認められた存在へと生まれ変わるものだ。

素晴らしい作品だわ。身をやつれさせるほど自分の使命に打ち込み、狂氣と歡喜に彩られた表情。こういった犯罪気質の表情には早く簡単には出会うこととはできないのよね。芸術的なあなたの表情だけを美術館に保管してあげるわ。それが神から与えられた私の使命

なのだから。

さあ、次はどうしようかしら。できることなら一昨日この人と喫茶店で話していた人がいいわね。普段はいい加減だけど、これと決めたことには打ち込むヒーローの表情。あの表情が欲しいわ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7032n/>

---

凸凹

2010年11月14日02時03分発行